

## 序言

松方冬子

2022年1月24日（月）東京大学史料編纂所共同利用・共同研究拠点特定共同研究（海外史料領域）「モンスーン文書・イエズス会日本書翰・VOC文書・EIC文書の分野横断的研究」主催、東京大学史料編纂所・日本学士院・日蘭交渉史研究会共催により、日本学士院UAI（国際学士院連合Union Académique Internationale）関連事業「在外未刊行日本関係史料」100周年および日蘭交渉史研究会70周年を記念して、講演会『日本関係海外史料蒐集事業の足跡』（略称：UAI100）を開催した。日本学士院会員佐藤彰一氏、東京大学史料編纂所保谷徹氏、同松井洋子氏にご登壇いただいた。コロナ感染拡大のためオンライン開催となったが、82名の参加者を得た。

佐藤氏の講演は、「第一次世界大戦戦後処理とUAIの創設」と題し、日本関係海外史料蒐集事業の歴史的背景として、UAI創設に至る経緯を解説するものであった。保谷氏の講演「在外未刊行日本関係史料蒐集事業のあゆみ」は、同事業に対する日本側の取り組みに光を当てた。松井氏は「蒐集マイクロフィルムの目録化とその意義—オランダ語史料を中心に—」と題し、蒐集オランダ語史料の目録作成事業について講演を行った。

主催者として若干の感想を述べたい。まず、史料編纂所に就職して以来30年近く、「蒐集事業」だと思っていた事業のUAIにおける正式名称が、「在外未刊行日本関係史料」であったことを実証的に「発見」したことが一番の驚きであり、喜びでもあった。同事業の射程は、当初から蒐集にとどまらず、目録作成・翻刻・翻訳まで含めた幅広いものであったのである。今後、史料のデジタル化、オンライン公開によって「蒐集事業」の展望が見えなくなったとしても、同事業は発展し続けることが可能だろう。私たちはこの100年間、史料を丁寧に読み、読める人材を育成し、翻訳によって2つの世界観を架橋し、調査地との信頼関係を醸成しつつ、史料（原材料レベル）と歴史の語り（最終製品レベル）をつなぐ、「研究資源化」（部品の製造）を意識的、組織的に行ってきたのだ。次に、1890年代に、帝国大学歴史学教師L・リースの提言により開始された日本関係海外史料蒐集事業が、先人たちの絶えざる努力によって続けられてきたことを再認識し、温かい気持ちになった。さらに、その努力が歴史的な経緯の中で世界の歴史学全体の歩みとも連動しながら進められてきたことを知り、未来を構想するにあたり、大いに励まされた。同事業は、ナショナル・ヒストリー構築の流れに乗り、それに寄与すると同時に、日本をヨーロッパの学術ネットワークのなかに位置づける役割も負った。これからはグローバル・ヒストリー構築の流れに乗り、それに寄与すると同時に、日本を世界的な学術ネットワークのなかに位置づける役割も負うことができるだろう。つまり、本講演会は、「自分たちの歴史を書くこと」そのものだったのであり、実証的に歴史を振り返ることが、新しい時代を生きていく人間にとって必要なのだということであらためて認識する機会にもなった。